「対話と実行」座談会　グループ・団体との座談会
第１回　「れいほく田舎暮らしネットワーク」（H22.7.6）の概要

（１）開会（県司会）

県司会：　これから座談会を開催させていただきます。

この「対話と実行」座談会は、知事と地域の方々との対話を通じて地域の実情や、課題を把握し、地域の声を県政に反映させる目的で平成２０年度から開催をしております。それでは、開催にあたりまして知事から皆様へのご挨拶と県の移住促進の取り組みについてのご説明をさせていただきます。

（２）知事挨拶

今日は、お忙しいところを「対話と実行」座談会にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

この「対話と実行」座談会でございますが、地域の皆様のところにお伺いしまして、様々なテーマについてお話をさせていただき、いろいろな県政のアイデアなどを教えていただいているところです。

今日は、れいほく田舎暮らしネットワークの皆様方、また、会場においでいただいた皆様方とお話をさせていただく中で、移住促進の取り組みについて、いろいろなアイデア等をいただければと思っております。

この移住促進の取り組みは、当初は、団塊の世代の皆様方が大量に退職されるのをいかにこの田舎で受け入れていくかという発想でした。今もその発想自体が変わっているわけではありませんが、もう一段追加して、産業の担い手、特に一次産業の担い手を何とか確保していくことが必要だという視点も新たに加わっております。

お手元に高知県産業振興計画のパンフレットをお配りさせていただいておりますが、高知県の経済状況は、平成１２年以来、非常に厳しい状況が続いておるわけですけれども、その最大の背景は、人口が減少したことと、高齢化が著しいスピードで進んでいることにあります。実際のところ、人口は、７７万人を切るところまで減り、高齢化率は２８％で、全国に先駆けること１０年先行している状況です。

この両方の効果が相まって、県内の市場規模というものは、ここ１０年で約２割小さくなりました。

そういう状況ですから、高知県の経済を立て直していくためにやらなければならないのは、地産外商であります。県内市場を補って、それ以上の効果をもたらさなければなりません。地産外商を進めていくためには、一次産業自体を伸ばしていくということもありますが、あわせて産業間の連携もしていかなければなりません。

ただ、一次産業こそ高知県の強みですが、その一次産業の担い手ほど真っ先に減少しているということに非常に強い危機感を持っています。ここ数年、一次産業の担い手は２割

ぐらい減ってきています。このままでは、１０年経ったら一次産業が高知県の強みだとさえ言えなくなるのではないかと危機感を抱いております。

この一次産業の担い手をもっと確保していきたいということで、政策誘導により一次産業に就業していただく方を増やしていくことができないかということを大きな課題として持っています。

生産地の足腰の強化と担い手の育成をはかっていくために、いろいろな就業促進策、就農促進施策、林業、水産業への就労促進策を講じようとしているところです。

高知県に暮らしていただくこと自体も非常に有難いことなんですが、それに加えて、産業の担い手になっていただきたいということで、そういう方を県外から呼んでくるということもひとつの目玉になってきているということでございます。

今日は、田舎暮らしネットワークの皆様方からいろいろお話をうかがう中で、今後、より一層の移住促進を図っていくためにはどういうことをすべきなのか、そういうことについていろいろ教えていただきたいと思いますし、外からおいでいただいた皆様から見た高知県の魅力などについてもご教授いただければ幸いかと思っております。冒頭、移住促進について今どのような施策をとっているかということを簡単に説明させていただきます。

まず、平成２１年度の取り組みでは、相談窓口として移住コンシェルジュを３名、委託事業で配置しました。ワンストップ窓口でいろいろな相談をお受けさせていただこうということです。そしてもうひとつ、フォローアップデータベースというものを構築して、個々の移住希望者の方の相談情報をデータベースで管理して、抜けのないように対応をさせていただくようにしております。あわせて、受け入れの基盤整備といたしましてインターンシップ事業ですとか、滞在型市民農園の整備、移住促進のための空き家調査などを実施してきたところです。

これらを踏まえまして、戦略として三つの柱を立てています。１番目の柱はフォローアップ体制の充実強化を図るということ。先ほど申し上げました移住コンシェルジュの取り組みなどです。

２番目としましては、地域の受け入れ基盤の整備を図っていくことの取り組みを進めていきたいと考えています。

３番目が、こういう取り組みを効果的に情報発信するということです。

それぞれ詳しく申し上げたいと思いますが、まず、フォローアップ体制の充実強化というところです。真ん中の段に移住コンシェルジュと書いてありますが、こちらがワンストップの窓口ということになります。全部で３名をお雇いしていて、県庁の地域づくり支援課に１名。それから、ひろめ市場のところに窓口を設けて、そちらでもご相談をお受けしています。まずここで一旦相談を受けて、その方のご要望に応じて、例えば就農希望の方でいらっしゃれば、新規就農センターにつなぎ、農大の研修課のアグリ体験塾、農業大学校と順にご紹介し、さらには、市町村の新規就農研修支援をご紹介し、最終的には農業公社で集積した空き農地をご紹介させていただいて就農までつながっていくところをフォロ

ーさせていただきます。要するに、ワンストップ窓口で一旦相談を受けさせていただくんですけども、それを次の方、次の方、バトンタッチを着実にしていって、かつその様子をずっとフォローアップさせていただくということです。ただ、この仕組みが稼働し始めてそんなに経っていませんので、今、取り組みを進めております。従来、県の職員が電話で相談を受けていたんですけれど、民間の方がサービスもいいのではということもありまして、委託をしました。

もうひとつの戦略の柱で、受け入れ基盤の整備をしようということなんですが、市町村においてお試し滞在施設を整備する場合、補助金を出しています。ソフト事業についてもいろいろと、空き家の状況把握と活用の有無についての調査であるとか、そういったものについて補助金を出しています。

また、ふるさとインターンシップ事業ということで、大学生などの地域への受け入れについても応援をさせていただくといった取り組みもしています。

あと、それぞれの市町村さんと協働のパートナーシップ協定を結ばせていただく取り組みを進めています。

もうひとつの柱は、こういう取り組みをしていることを県外の人にもっと知っていただかなければなりませんので、効果的な情報発信をするということで、都市圏で開催される移住相談会に積極的に参加をするように取り組みを進めているところです。平成２２年度で予定が入っているだけで、１７件の移住相談会などに参加するようにしています。

高知県への移住相談件数でありますが、幸い、とても増えてきていまして、平成１９年度が１５０件、平成２０年度が２５０件、平成２１年度は３３６件、平成２２年度は、今のところ通年では４００件を超えるペースでご相談をいただいているところです。平成２１年度は、この仕組みの中で９組の皆さんに移住をしていただきました。

以上、高知県の移住促進施策として、今、構築しているシステムについてお話をさせていただきました。このあと、皆様方から実体験に基づかれたいろいろなお話を聞かせていただいて、このシステムにもっと血を通わせることに役立たせていただきたいと思いますので、是非、いろいろと忌憚の無いご意見をいただければと思っております。

（３）れいほく田舎暮らしネットワークメンバーの発表と意見交換

県司会：　本日の座談会の進め方ですが、まず、ネットワークのメンバーのご紹介と取り組みのご説明をしていただきまして意見交換。次に、ネットワークのメンバー６名の方から、体験談等をご報告いただき、それぞれ意見交換を。最後に知事からまとめのご挨拶を申し上げます。また、会場の皆さんからのご意見もいただく時間もとりたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

それでは、テーブルについていただいておりますネットワークメンバーの皆さんの自己紹介と活動報告をネットワークの会長様からお願いします。

メンバーの自己紹介がありました。

【ネットワークの活動報告】

会長：　ネットワークに関する話を順次させていただきます。

私は、４２年前に土佐町から大阪へ出まして、７年前に戻ってまいりましたが、こちらへ戻って来ることは、ある意味わかっていたので、大阪で森林ボランティアの活動をやって、助走というか試運転をしながら高知へ帰る準備をしていました。

戻ってきた時には、このような組織をつくろうという思いは全くありませんでしたが、帰ってきて、その翌年くらいから移住された方を少しずつ訪問して、組織がどうのこうのということではなく、普段の話の聞き役みたいなことをしながら、土佐町だけでなく、大川も大豊も回りました。そして、メンバーは４年前に大体７１世帯だったのですが、現在１００世帯ぐらいに広がりました。

移住された方の移住先の特徴は、吉野川沿いの地区に半分以上の方が住んでおられ、その理由は仕事や買物、保育園の関係です。

大豊町と大川村はＩターンがほとんどで、土佐町や本山町みたいにかたまっておらず、バラバラと住んでおられます。

組織を作ることだけを急がずに中身のある組織にしたいという考えだったので、地道な活動を行って、シンポジウムなんかも先に開催して、２００７年（平成１９年）の１２月にれいほく田舎暮らしネットワークの設立総会を開きました。

ネットワークの活動状況ですが、平成１９年３月に「住んでみんかよ？嶺北に」として第１回のシンポジウムを開催しました。そして「継続は力なり」を合言葉に、毎年シンポジウムを開催しています。また、四万十町や和歌山県の那智勝浦町、山口県の阿武町といったところに視察に行っています。

地域活性化に果たしている役割としては、教育委員や青年団長、民生委員、部落長など、かなりの地域で移住された方が活躍しているようです。また、メディアに出たり、移住者が地域で新しいイベントを計画しているというのも、いい影響を与えているのではないかと思います。

次に、課題についてですが、ひとつは住居です。視察に行った阿武町の担当者は、この人が頼みに行ったら貸してくれるという切り札を探すのが鍵だと言っていました。

課題の２番目は、町村毎のリーダーの育成。３番目は、町村の担当者との綿密な連絡です。

家と仕事と農地の問題は、市町村の担当者が、実際に捜している人やお世話をする人と一緒になって、嶺北で言ったら４町村の担当者が情報を共有してやっていかないとなかなか前には進まないのではないかと思っています。

また、嶺北の受け入れ活動の方針については、嶺北自身をもっとアピールしてい

く必要があるのではないかと思っています。

移住者の持てる力を発揮させるためには、年齢や性別によって異なった対応をし、それまで都市部で培ってきた経験を生かせる部署を考えることが大事ではないでしょうか。

皆さんにお渡ししてある「れいほく田舎暮らしの１０か条」からいくつか申し上げます。

まず、思いつきで移住をするのではなく、お試し期間を経てから来てくださいということを最初に言っておく必要があると思います。

次に、候補地は数多く見て目を肥やした方がいいということ。一目惚れということもありますが、長続きをしません。

また、農家物件はあるようでありませんので、移住希望者には、まずは住み始めてからたっぷり情報を集め、そして考えればと言ってあげるのがいいのではないかと思います。

地域の各種行事は情報源になりますので、可能な限り参加をした方がいいと思います。最後に、嶺北定住の決め手は、結局、待ち受ける皆さんの温かい心だと思います。

知事：　ネットワークの活動の中で、一番移住の促進に役立ったこと、若しくは移住された方のサポートにつながったことは何ですか。典型的なパターンがあれば教えてください。我々も是非参考にさせていただきたいと思います。

会長：　やはり心が大切だと思います。相談される方と心が通じるようになれば、即解決とはいかなくても、かなり前進します。

知事：　移住を考えている方はどういう形で最初のコンタクトをとられるのでしょう。移住を考えている方からネットワークに相談があるんですか。

会長：　役場から我々に相談があったり、メンバーの人が個人的に相談を受けたりといろいろなパターンがあります。

知事：　実は今、ひとつの壁に突き当たっていることがありまして、住むところや農地の情報を提供させていただいて、移住につなげたいと考えており、できるだけたくさん情報を持っておきたいのですが、特に農地はなかなか情報を提供していただけない場合が多いんです。というのは、登録をしてしまうと、土地をいずれ取り上げられるのではないかと多くの方が思っておられ、大切な土地と家の情報を他人には教えられないということなんです。

データベースに農地などの情報を蓄積しようとしており、丁寧なやり方で紹介をさせていただくということで情報提供をお願いしているのですが、そんなことで情報を集めるのに苦労をしています。

そんなことですので、先程「心」と仰いましたが、やはり最後は信頼関係が一番大切なんだろうなと思いました。この人だったら、この人が紹介してくれるんだったら信頼してもかまわないと思っていただけることが一番大切なのだろうと思います。まさにネットワークの皆さんはそんな役割を果たしてこられたのだと思います。

会長：　田舎に住みたい方は、農家に住みたいという方が多くて、少々汚くてもいいから古い農家を貸してくれるところはないだろうかという思いを持っています。それを解決する１つの鍵は、その農家を貸しもらうためのキーマンは誰かということです。そこのところを詰められず、話が止まっているというところが問題ではないでしょうか。そこを解決しなかったら田舎の一軒家を借りることはなかなか無理です。私たちみたいな都市部からの移住者、役場の職員、土地の有力者、この三者がセットになってこまめに動くということが大切ではないかと思っています。

知事：　ありがとうございます。やはり、まず人間関係をしっかり把握して、信頼関係を築くということがベースになるんですね。私たちの取り組みで言えば、そうしたネットワークを全県下でどれだけ張り巡らせていけるかが重要になってくるのだと思います。町村担当者との密な連絡体制、受け入れ側、移住をして来られる側両方に関わるリーダーの育成を各地域でどれだけお願いをしていけるのかということが１つのキーになるのかもしれません。

高知県内で移住が進んでいる地域が２つあると思っており、その１つがこの嶺北地域で、もう１つが黒潮町なんですが、共通しているのは、地元でしっかり受け入れていこう、さらに、入られた方をしっかり支えていこうというネットワークがあるということであり、そのことが非常に大きいのだなと思いました。

【れいほく田舎暮らしネットワークメンバーの発表】

Ａさん：　副会長のＡです。私は嶺北移住者の会の会長もやっておりまして、これは移住者同士の交流を目的とした任意団体なんですが、パンフレットやチラシを作成して、各町村、転入届の窓口等で配布させてもらっています。各町村に行ったらありますので、よかったら一度ご覧になってください。

Ｂさん：　私の移住の動機ですが、私は大阪出身で京都に住んでいたのですが、夫の実家が土佐町でして、そこが自然いっぱいのところで、休みの度に通っていて、いつかそこに住みたいなと思っていました。子供ができた時、思い切って移住をして

みようと夫婦で決めました。

移住した際の障害についてですが、うちの場合は家の問題はありませんでしたが、就きたいと思える仕事がありませんでした。どうせ移住をするなら、自分たちの経験を生かしてできることをということで、地域でとれる食材もとてもいいものだったので、それらを使ってできる仕事をということで、今の「ぽっちり堂」というお菓子屋を始めました。

その中で助かったのは、まずインターネットで始めようと思ったので、ネット環境が整っていたことです。もしインターネットがなかったら、私はずっとここでは暮らしていけないのではないかと、いろいろな意味で思いました。

その次に障害といえば障害だったのは、私は、田舎が好きといっても大阪出身で、街の中で育った人間なので、田舎での人付き合いであったり、文化、そういうものに理解ができない部分がすごくありました。それを、夫がいたから通訳してくれて、３年とか４年かけてやっと理解してきたという感じです。助かったのは、うちは夫の家族がここにいたので、その人達の信頼関係を継がせてもらったところがあって、町の人にもすごく親しんでもらっているなと思っています。

これは自分自身の障害ではないですけれど、いろいろな人が、つてをたどって私達のところに空き家のことや移住のことで相談に来られます。やはり、行政にも行ったりするんですが、空き家というのは行政の人が貸してくださいといって貸してくれるようなものでないところもありますので、空き家の大家さんと私達が普段からお付き合いをして、信頼関係ができているような場合には、あらかじめ大家さんに紹介してもいいかどうかを確認しておいて、おつなぎしています。その場合、私達も大家さんとの信頼関係がありますので、それを壊すようなことはできませんので、この人にだったら、と思う人に紹介しています。

ひとつ思うのは、移住者というのは、あまりすぐに結果がでるものではないということを感じており、すぐ来て、空き家をあっ旋して住むというのではなく、５年とか１０年とかずっと付きあっていく中で、移住を考えている人達も具体的に住むというイメージができるなど、あまり結果を望まない、望みすぎないで紹介できることはするというぐらいでやっています。

その中で思うのは、移住コンシェルジュをやっているというのはすごくいいと思うんです。どうしても行政だけの窓口だと厳しいところはあると思うので、担当の方のモチベーションとか、移住に関する理解力とか、どれだけ応援したいと思っているかとかにも左右されるので、本当に移住を歓迎して、できたらいいなと思っている団体があるならば、そういうところにできるだけ協力を求めたほうが、実際のところは役立つかなと思うこともあります。

住んでみてのマイナス面としては、田舎暮らしと言っても京都でするのと高知でするのとでは全く違うと思いました。ここでは、都会にたまに行きたいなとい

うときにぱっと行けるわけではなく、それが私にとっては結構苦痛な時もあります。それでも、高速バスとか飛行機とかもなんとかあって、助かっているので、それだけはなくして欲しくないと希望します。

プラス面として、良かったと思うのは、子供を本当に伸び伸び育てられるところです。家族が本当に協力してくれたり、地域の方も子供が少ないだけにすごく温かく見守ってくれます。それと、スーパーとか病院とか公共機関というのがすごく身近に集まっていて便利だと思います。

田舎ですけれど、すごく住みやすい場所だなと思っています。以上です。

Ｃさん：　私は、今から４年前に東京から夫婦で本山町に移住してまいりました。私も妻も関東出身なので完全にＩターンです。

移住するにあたって感じた問題点ですが、一番困ったのは家と仕事に関する情報の少なさです。不動産屋に頼もうと思っても嶺北に不動産屋は一軒もありません。しょうがないから役場に尋ねたら、空き家はほとんどないというふうに言われます。ところが、実際に嶺北に住んでみて、地元の方々と話すうちに空き家は数多くあるということが分かってきました。空き家はあるのだけれども、その情報が移住しようとしている人には届かない。

また、嶺北には不動産屋がありませんので、役場としても情報の提供を行うだけで、あとはお二人でどうぞとなります。そうなってしまうと、借り手も貸し手も不慣れなものでとても困ってしまいます。特に、貸す側ですね。地元の人達は、そんなことは初めてなので、直接契約をやってくれと言われても、尻込みしてしまう人が多いというのは当然のことだと思います。空き家はあるけれども、実際に貸してもいいよという情報が出てこないというのは、間に信頼がおける組織なり人がいないというのが大きな問題ではないのかと思います。

仕事についても同様です。無いわけではないんですが、求人情報は町内で回っているだけで、町外には出ることがない。これも、家の情報と同じく、責任を持って求人情報の仲介をやってくれる団体があれば、かなり情報も集まってくると思います。

Ｉターン移住者が最も欲しているものは、家と仕事に関する情報ですので、これらの情報提供と、そして、情報提供だけでなく、実際の仲介ですね、不動産仲介だとかちゃんと責任を持って仕事の紹介をしますという組織の立ち上げがあれば、かなり大きなＩターン移住者への助けになるんじゃないかと思います。

次に、私が嶺北に４年間住んで感じる嶺北の将来像について。嶺北という土地は、田舎暮らし希望者にとって決してメジャーな土地ではないと思います。都会へのアクセスを求める人や逆に広大な大自然を求める人、農業をやりたい人、そのような人がＩターン希望者の大半なのでしょうけれども、そういう人が嶺北と

いう土地を積極的に選ぶ理由はありません。考えてみると、嶺北というのは、本当に紹介するのに困るというか中途半端な「古き良き日本の田舎」という言い方しかできない土地だと思います。

ただ、そのような土地に魅力を感じる人というのも少数ですがいると思います。嶺北という土地は、特に何があるというのではなく、棚田や小川に囲まれたごく普通の里山風景というのが一番の魅力であると思います。

そのような土地である嶺北の将来を考える時に、嶺北の魅力を引き立たせるためには、徹底的に田舎であろうとすることだと思います。川が美しく、山が美しく、棚田風景が美しいといった今ある嶺北の魅力をもっと引き立たせる方向こそが大切だと思います。

嶺北は、他の土地から比べれば、日本の中ではかなり自然の残っているほうだと思いますが、数十年前と比べたら見る影もないほど貧相になってしまったといいます。その原因がどこにあるかというと、これは、スギやヒノキといった人工林の行き過ぎた植林にあるのではないかと感じています。嶺北の山の８割近くをスギとヒノキにし、しかもそれが林業として採算が取れず荒れ果てたままになっているということは、農業、漁業、観光といった多岐に渡る分野に多くの被害を与えているのではないかと思います。この山を広葉樹林に戻すために、何とか山の地主さんへと利益還元できるシステムを作ることが必要じゃないかと思います。いろいろなところの利益の一部でも何とかこの嶺北の水源地である山の地主さんのところに還元できるシステムがあれば、例えば、今後の環境問題におけるトッププランナーとしても嶺北が注目を集めるのではないかと感じます。

Ｄさん：　何を話そうかと思ったのですが、私の１２年間の試行錯誤が何か皆さんのヒントになればということでお話してみようかと思います。

私は、福岡に住んでいた時には、不登校の子供とか中退の子とかいろいろな大人とか、何かたまれるような場所をやっていまして、最終的には結構広いところを借りてやっていたんですけれど、それでも行き場がなくて、もう家があふれているみたいな感じになってきていました。家がパンクしそうでしたので、山の中で農的な暮らしなんかも取り入れながらやれたらいいなと思っていた時に、ちょうどご縁があってこちらに越してきました。

最初は村営住宅を借りて、木星会というところで働いて、山暮らしを経験しながら少しずつ何かできていったらいいなと思っていましたが、いろんな人達がこれるようなところができたらいいなと考えて、ずっと家探しをしていました。

農的な暮らしもしたいと思っていたところに、ちょうど、ここに座られているＨさんから自然農法をしている田んぼがあるから貸してくださるということになって、やっていたんですけれど、通いながらだととても田んぼは無理だというこ

とが、身にしみてわかりました。それで、大川村の中でどこかないかと探したところ、広い棚田が５段放棄されている場所を見つけて、そこを貸してもらえることになりました。近くに住まないと、水の管理なんかができないと思い、古い家を見つけたのですが、そこを貸していただくにあたっても、本当に苦労をしました。

部落長さんに相談をしたりするうちに、キーパーソンは、大阪に住んでいる８０過ぎのお爺さんだということが分かったのですが、そのお爺さんが香川県の娘さんのところに来られた時に、直接会いに行ったりして、何度か話をして、やっとそれなら貸そうかということになりました。

家探しに関しては、先ほどから言われているように、本当に個人的な人のつながりがあって信頼関係を得ないと難しいということは感じています。私達は、もともと両方とも親が大川村に住んでいるわけではないので、もともとの地盤も何もなくて、本当に信頼関係をつくっていくのには地道な努力が必要だなということを感じさせられました。

もうひとつ、子供が不登校になったんですが、親子共々しんどい思いをしていた時に、県の心の教育センターの方などにすごく助けていただいて、外からぽんと入ってきた者にとって、いろいろなところとつながりを持って支えていただけるということが有難いなと感じました。

それと、大川村は今、小中一貫校で何とか保っているんですけれども、全部統合して小学生から宿舎に入れたり、バスで通わせて、もっと皆まとめて教育したほうがいいのではというアンケートが来たことがあったんですが、過疎の村に子供の声がしなくなったり、学校の行事がなくなったりしたら、本当に寂れていくと思うので、是非、そういうことにならないよう、お金はかかると思いますが、自然の中で山の現実を身にしみて感じている子供を育てるということも考えていただけたらと思います。

とにかく、私はこういうところにいろいろな意味で行き詰ったりした人たちが和やかに過ごせる場所がいつかできたらいいなと思いながらぼちぼちと暮らしております。

【前半３名の方と知事との意見交換】

知事：　家を探すにしても、仕事を探すにしても、行政だけの窓口では難しいので、地元のネットワークに協力を求めたほうがいいのではないかということが、３名の皆さんのお話をうかがって、本当にそうだなと思いました。

やはり、ネットワークの皆さんと行政が協働をさせていただくという仕組みづくりを県内にどれだけ張り巡らせていけるかというのは、ひとつのキーであると思います。

もうひとつ、Ｂさんのお話の中で、５年とか１０年という長期スパンでみたほうがいいのではということでしたが、私もなるほどなと思いました。付き合いを段々と深めていく中でお互いをよく知り合って、信頼できる人に家を紹介していくとか、そういうことが必要なんじゃないかというお話だったんですけど、やはりそこは実践しておられるんですか。窓口として重要なポイントだと思ったのですが。

Ｂさん：　こちらに移住して来てからすぐにそういうことはやっていて、田植えをしたりとか、何か田舎のイベントがある時に呼んで一緒にしたりとかはずっとやっています。それを通じて来てくれる回数が多い方がいろいろな話もできるし、しんどいことも含めていろいろなことがわかるので、そのうえで決められるのですごく良いと思います。

知事：　とりあえず試すというのもひとつの手なのかもしれません。すごく勉強になって、もうちょっとそこの仕組みを工夫できたらと思いました。

ちなみに、都会とのアクセスは、やはりキープできた方がいいですか。

Ｂさん：　そうですね。やはり自分が街の人間なので、自然は大好きですけれど、ここの人もすごく好きですけれど、いろんな文化背景が人にはありますので、そういう部分では、そっちも必要な時があると思います。いろいろなバランスの人がいると思うので、都会とのアクセスはあったほうがいろいろな人が住み続けやすいと思います。

知事：　いろいろな方のニーズに対応できますよね。さっき、Ｃさんも仰いましたけど、都会にすぐアクセスできる田舎は都会の周りにたくさんあるので、そういう中でこの高知県にあえて来てもらうためにはどうするかというお話だと思うのですが、もちろんアクセスできるようにしておくことは重要だと思いますが、あえて嶺北だったり高知県だったりするのはなぜなのかというところをよくよく見極めていかないといけないと、お話を伺いながら思いました。まさにＣさんが仰ったように、都会の真似をしても駄目なので、田舎としての良さをいかに伸ばしていくか、それが強みを伸ばすということになるのだろうと思います。

Ｃさんがおっしゃったことで、なるほどと思ったことがふたつあります。まず最初に、家と仕事の情報について責任を持って仲介する組織が必要であり、かつその情報は、紙媒体よりインターネットのサイトでできるだけ明らかにしていくべきだということですが、これについては全く私も賛成です。実際、移住の相談をしていただく中でも圧倒的に多いのがネットでアクセスしてもらう件数です。県としても、移住希望者の方は最初にネットで探されるから、ホームページにアクセスしてもらって、次

に移住コンシェルジュにいろいろ話をしていただいて、そうして、家にしても仕事にしても出来るだけ責任を持って仲介をする組織体制を目指して、今、作りこみをしているところなのですが、Ｃさんのおっしゃったのは、ネットのうえで信頼感がもっと見えるようにすべきで、電話して相談したりする前に、ネットだけ見て、安心感が得られないとその次に進めないと、そういうことでしょうか。

Ｃさん：　**インターネットで情報を出す場合に一番重要なのは情報量だと思います。情報を多く出すためにどうすればいいかというと、そのために信頼ある、ちゃんと仲介ができる団体をつくるべきであって。嶺北に関して言えば、ネット上で見れる情報の数をもっと充実させていただきたいと思います。**

知事：　例えば、個別の家の情報まで出せないにしても、ここのあたり周辺に何件の空き家があるというだけでも出しておけばアクセスしようかなという気になるということでしょうか。

Ｃさん：　**そうですね。具体的な情報じゃなくても、間取りと外観だけといった具合でもあればかなり助かると思います。**

知事：　仕事についても、仕事情報をできるだけ一元的に集約しようとして、「高知仕事ネット」というのを今、ネットで作っています。できるだけいろいろな情報を集約しようとしていますが、それが移住の窓口とリンクしているかというと必ずしもそうはなっていないと思います。

　移住コンシェルジュに相談していただいたら、仕事のことについては雇用労働政策課というところにつないで、そこからいろいろご相談に応じるというシステムにはなっているのですが、最初にネットである程度わかるようにしておかないと、移住コンシェルジュに相談しようという動機にはつながらないのではと、そういうことですね。

Ｃさん：　**そうですね。全部は出せなくても情報は多く出したほうがいいと思います。**

知事：　非常に実践的な良いアドバイスをいただきました。ありがとうございます。

　嶺北の将来像についてですが、田舎としての良さといいますか、自然あふれるところの良さを伸ばしていくということは、私も大賛成です。さっきの人工林の話ですが、伐採した後とか、その後にそのまま手を加えないで広葉樹に戻していこうかという地域もあるのはあるんです。ただし、Ｃさんがおっしゃったように、広葉樹にした時に、山主に何か利益が還元されるのかと言われると、確かに今の状態では無いかも

しれません。もう林業を諦めたので、もうそのまま自然林に残していこう、変えていこう、広葉樹にしていこうというのが現実のところだと思います。

林業としての業をしっかり成り立たせていって山を豊かにするという意味においては、まず第一に間伐をしっかりやっていくということが一番の王道だと思います。ただ、山の多様な使い方として広葉樹に戻していくことによって経済的利益も還元する仕組みづくりというのは、確かに考えてみてもいいのかもしれません。具体的なアイデアはありますか。

Ｃさん：　広葉樹に戻すことで、これをどこが利益を得るかというのを科学的に分析するのは難しいと思います。具体的にどうすればいいのかというのはわからないんですけど、何とか県の枠を越えたところで、下流から上流へ利益を還元できるシステムが何かできればいいなと思います。

【れいほく田舎暮らしネットワークメンバー後半の発表】

Ｅさん：　大豊町のＥです。帰郷５年目にして感じていること、思うことについてお話しします。

私の場合はＵターンですが、なぜここに帰って来れたのかと考えた時に、理由は５つあります。

まず、家と狭いながらも田畑があったということ。

それから、近所に人がいた、近所があったということ。

３番目は、家の周囲は農地でスギやヒノキに覆われていなかったいうこと。

４番目が、車が家の庭まで入れること。要するに道が整備されているということ。

５番目が、これが一番ポイントで、パートナーが一緒に来てくれたことです。自分の周囲の人からも（大豊町）怒田の出身の人は帰ってきたいと思っているけれど、パートナーがなかなか「うん」と言いそうにないという話を聞いています。そこで、私が考えているのは、パートナーが帰って来たくなる環境をどうつくるかというのが、今の課題ではないかということです。

今、感じていることについて。地域を存続させるために行動すること、外部から人を呼び込むことについては、地元の人の評価というのはいろいろだと思います。こんなつらい仕事を子供にはやらされないとか、こんなへき地でとか、怒田での生活を拒否している人達をどう変えるかというところが、大きな課題としてあると思います。

素晴らしい怒田をこのまま消滅させてはいけないということで、自分が今まで育んできた経験、あるいは知識、そしてネットワークを使えないかと考えました。たまたま私は大学の事務職をやっていましたので、先生方に来てもらって、いろ

いろ活動をしていただいています。

もう１点、怒田の情報をできるだけ出すことによって、怒田出身者に、今の怒田をどう見せるかということです。その２点で自分が何か役割を果たせるだろうかと考えています。

次に、私のやっている百姓の内容についてですが、私のように年金暮らしの人間だからここでのんびりできるわけですけれども、ここで生きていく、ここで稼ぐということになると、状況は厳しいと思っています。その厳しい状況をどう解決するかということで、行政への要望を２つあげました。

（１）Ｉターン受け入れ準備補助金制度

（２）地域の土地の有効利用のために、中山間地域での遺産相続に際して登記料の補助、相続しない場合には自治体が寄付を受けることの制度化

怒田の集落と他の集落の違いは、中山間地域の非常に特徴的な部分が怒田にはないということで、怒田の集落は、周囲はまさにスギ・ヒノキに浸食されようとしていますが、集落の中にはほとんど木がありません。私が今、考えている美しい怒田づくりというのは、このような昔の山村の原風景をいかに維持していくかということです。そのことで、さっき行ったようにパートナーが来て住んでもいいかなというふうになればいいと考えて、基本的には集落内の木をできるだけ切っていきましょうと、皆さんに働きかけながら細々とやっています。

Ｆさん：　私は、出身は東京都でして、最初は会社勤めをしまして、体調を崩したことがきっかけでアロマセラピーという世界に入りました。

もともと私自身が仕事に住環境をとらわれたくないというのがありましたので、自分でできる何かを身につけたいということと、自然豊かな土地で住みたいということを幼いころから思っていました。

大豊町には、ご縁で来ることになりまして、自分で調べ上げて、自分で住みたいと思ってきたわけでは、正直ありません。主人の仕事がこちらにありましたので、それで来ることになりました。

家の問題に関しては、私自身はもう既に主人が住んでいたものですから、有難いことに住む場所がありました。ただ、主人は大豊に住みまして、今年で５年目なんですけれども、最初は非常に苦労したと聞いています。

大豊町の魅力は、やはり自然です。どっぷりつかったというか中途半端でない田舎というのが、私達としても魅力です。これは多分、ずっとこの土地で生まれ育った方には正直わからないと思います。

私は、アロマセラピーという仕事をしていますが、こういった奥の土地でお客さんが来てくれるのかという部分の不安はやはりありますけれども、田舎に住むと腹をくくった以上、一度来ていただいた方に少しでも多く魅力を感じていただ

けたらなと思って店づくりをしています。

移住をして不便に感じたことは、やはり、田舎の家を借りているので、最初、手をいれることは必要でした。私と主人にとっては、それが魅力でもありましたがそういう部分が、自分達でしていくという気持ちがないと、なかなか難しいのかなというのは正直感じています。

また、下水道が整備されていないので、洗剤なんかを垂れ流すということがすごくストレスというか、悪いのではという思いもあって、そこのあたりが田舎で住むデメリットではないでしょうか。住む方も自然に対する意識を高めていかないといけないのではと思っています。

大豊町にもっと人が来るようになるためには、やはり、ここの自然が魅力だと思いますので、例えば、せっかく良い場所で川もきれいなので、都会の小学校の子供達をサマーキャンプに呼んだりしてはどうかと思います。やはり子供が楽しいと感じるということがひとつの大事なキーポイントなのかなと思っています。

Ｇさん：　私は移住をしたわけではありませんけれども、ネットワークをつくる前から、来る人達を迎え入れて、歓迎会をして、移住をして来た人と顔つなぎをして、なるだけ一緒に力を合わせてやっていけるようにと思って、一緒に活動するというか相談にものったりしてきました。

でも、これは、決して人のお世話をしているんじゃなくて、大豊で私が、私の子供たちがここで住み続けるためにしているのであって、人が居なくては私達も住めないということです。だから、私は決して人のお世話をしてきたんじゃなくて自分の世話をしてきた。そういう気持ちで今もおります。

今、私は、ＷＷＯＯＦ（ウーフ）という、簡単に言えば農村を経験するホームステイをさせて、一緒にご飯を食べて、一緒に作業をするという活動をしています。この活動の目的のひとつは、大豊に住んでくれるような人はいないか探すことで、農作業をしたいという若い女の人は大豊の独身男性と結婚してくれないか会わせてみたり、住みたいという人には家と土地を世話して住んでもらったりということをしています。

私は、自分がやりたいことが実現できることが個人の幸せにつながるんじゃないかと思っていますし、今まで都会に出て行って、便利な生活と報酬を手に入れて豊かになれると思った都会の人達が、本当の豊かさというのは農村でこそ実現できる舞台があるんじゃないかと、気付きはじめたんだと思います。全国の市町村がそのチャンスをつかもうと皆努力をしていますので、この嶺北の町村も早く基盤整備をして、情報もいっぱい持って、チャンスをつかむよう、皆で一緒に努力してやっていきたいと思っています。

【後半３名の方の体験談に対する知事のコメント】

知事：　どうもありがとうございました。Ｅさんのお話で、帰農できた理由の１つに、「近所に人がいたこと」とありましたが、これは重要ですよね。あと、「パートナーが一緒に来てくれたこと」とのことでしたが、これも非常に重要ですよね。私も２年半位前にちょっとそれで苦労したことがありましたので。本当にそう思います。ただ、その時に、来たくなる環境というのは、原風景を維持することだって仰られていましたけど、それは、高知の、この地域にとっての強みをいかに伸ばしきるかということにあたるのだと思います。本当にそこのところは心していかなければならないと思っています。

やはり、観光にしても地域振興にしても、持っているものの良さを素直に伸ばしていく方向は堅持しないといけないと思います。リゾート観光ではなくて滞在型、体験型観光、こういうものを地道に伸ばしていくということが、地道なようですけど王道であり、いずれ成果を生むのだろうと、今のお話を聞いて思いました。

行政への要望の、Ｉターン受け入れ準備補助金制度ということについてですが、もともと地元におられる方とのバランスとかいろいろ考えなければいけない部分はあると思いますけれど、他方、公共性のある点もあるのではないかと思いますので、どういうことができるか、ちょっと研究させていただきたいと思います。

登記料の話は、国の絡む話なので、私だけでは何とも言えないんですが、いずれにせよこういう基盤整備が重要なんだろうと思います。そこはまだ今、私としてははっきりと言えないということでご理解賜りたいと思います。

それと、Ｆさんの仰ったことの中で、中途半端でない田舎、これの良さというものを都会の人がものすごく価値に感じることがあって、その体験自体をもっと発信していくべきだということでしたが、それは、本当にそうだろうと思います。

都会の子をサマーキャンプに呼んできて、短くてもいいから１回体験してもらう中で良さを知ってもらう。いずれ大人になった時のことを考えて。これ、都会の子の教育にも良いでしょうね。

Ｇさんのお話で、農山漁村に本当の豊かさがあるということに全国の人が気付き始めたということでした。私は、この気付いてもらうことが、日本全国のために是非とも、日本の将来のためにも必要なことだと思っています。

是非、人が生きるために必要不可欠なものがあるこの田舎の良さというものを全国に知ってもらう。若い人に残ってもらう。そういう地域づくりというのは、国政として取り組んでもらいたいと私は思います。分散型の国土形成ということを本格的に考えなければいけないということを、私は、Ｇさんが仰ったこととちょっと視点は違うかもしれませんが、深く同感だと思っています。

そのために高知県として何ができるか、移住促進のために、「高知で暮らす。」のような直接的な取り組みもしますし、また、田舎の良さを生かしたかたちで、一定暮

らしていくことができないといけないでしょうから、産業振興をはかっていく、子供たちを地元で暮らせるようにするためには、教育はどうなのか、Ｄさんも仰いましたが、単に経済的な観点だけで小学校の統廃合をやってしまっていいのか。よくよく考えないといけないと、感想になってしまいますが、そう思いました。

【その他のネットワークメンバーからの意見等】

Ｈさん：　私は、定年帰農で田舎暮らしを求めて帰ってきました。今は、農業委員会を通して三反の田んぼを取得しないと農家になれませんが、自給自足で田舎暮らしをするには、１０ａか２０ａもあれば十分なんです。私は今、大石というところに住んでおりますが、司馬遼太郎の小説の中で、長宗我部元親が「桃源郷を見た」と言っているようなところです。今はもうそのような姿は見えませんが、６５年前には本当に素晴らしい、嶺北一と言える棚田が存在をしていました。そこへ帰ってきて、向かいの棚田が荒れていることに心が痛んで、あえて棚田農園の農村風景、景観の再生と棚田復活、そして環境にやさしい農業に取り組んでいます。

　知事さんにも何回か直訴したことがありますが、この農村風景、棚田の復活ができれば、中山間地域の産業振興の再生ができるのではと思って、実践しています。百聞は一見にしかず。私の農園を見に来ていただければ、どういうことをやろうとしているのかということがわかっていただけると思います。

Ｉさん：　質問ということではないのですが、移住者の方は他にもたくさんいますが、皆さん本当に熱い想いでがんばっています。地元の方々も空き家をお世話したりとかされている方がたくさんいらっしゃいます。大豊町なんか範囲が広いので、各地域ごとにそれぞれ頑張っていらっしゃる人がいっぱいいらっしゃるので、その方達とのネットワークをつなげて情報交換をしながら一緒に大豊町、嶺北地域を盛り上げていけたらいいと思っていますので、よろしくお願いします。

Ｊさん：　先ほどから皆さん、ネットでの情報発信の大切さというお話をされていましたが、今、高知県では市町村紹介ムービーというものをインターネットで公開していまして、本山町の紹介ムービーも公開されています。それがとてもひどいです。とても大切で重要な事業だと思いますので、せめて一番この町が魅力的に映る時期に、天気が悪ければ天気のいい日に取り直すとか、水の少ないような時には水の多い日のＶＴＲを入れるとか、もう少し良くできないでしょうか。

知事：　ＤＶＤをつくる期間というのがあって、その期間がたまたま魅力的に映らない時期にぶつかってしまったからだということなのですが、ネガティブメッセージを発することになってもいけないので、ちょっと考えてみます。

Ｉさんがおっしゃったことは、もうそのとおりですよね、ネットワークをいかに広げていくか。行政のネットワークと皆様方のネットワークの密接なネットワークを作らせていただきます。それに向けて今回を第一歩にさせていただけたらと思っています。

それから、Ｈさんのお話で、棚田の復活。選挙のときにおうかがいさせていただきましたが、棚田をみた時、「すごいな」と思ったのが忘れられません。確かに財産ですよね。

どういうかたちでやっていくか、棚田の復活に取り組んでいくにはかなり大規模な仕組みが必要だと思うんです。できるだけ多くの方を巻き込んで、市町村等の協力のもとで一緒にやっていけるようになれれば一番いいと思います。（地域産業）振興監もおりますので、引き続き相談させてください。方向は仰るとおりだと思いますので、次はどうやって周りの人を巻き込んでいくかということだと思います。またご指導ください。

【来場者との意見交換】

Ｋさん：　**大豊町に越して来て４年近くになります。こちらに越して来る時に、家のことですごい苦労をしましたけど、その時に大豊町の職員さんにいろいろとよくしてもらいました。とっかかりというのは、地域の方に求めるのも必要ですが、その門を叩いていただくのは、やはり行政の方に先に行っていただきたいです。知事さんをはじめ県庁の方々、市町村長さん、議員さん、それから職員の方々皆が一丸となってやっていただきたいと思います。**

もうひとつ、道路のことなんですが、高知県を一歩出ると道路はすごくいいのに、高知は、特に大豊は道が悪いです。怒田のＥさんがおっしゃったように、住みたいと思ってもそれで敬遠される方も多々あると思いますので、知事さんにはよく考えてもらって、頑張って欲しいと思います。

知事：　ありがとうございます。さっき申し上げましたが、ネットワークだけにお任せするということではなく、行政も連携してやっていくことが非常に重要だと思います。

県でも、去年１年かけてシステムを作り、今年度回し始めました。そうしたら、相談件数がぐっと増えてきて、手ごたえというかそういうものを感じているところですが、今、いろいろとご意見をいただき、さらに改善すべきところもあると思いました。

今回のご意見を生かしてやっていきたいと思います。

道の話は、努力をします。この道の悪いことには私も怒りを覚えており、思いは共有していますので、またどうぞよろしくお願いしたいと思います。

Ｌさん：　本山町にあります、ばうむ合同会社のＬと申します。

私も４月から嶺北住まいを始めた、移住者です。今日のお話を聞いて、非常にすごいなと思いましたが、ネットワークで移住をして、仕事ということを考えた時、就農とか自営というかたちに限られているのかなと思いました。就農にしても、自営にしても高リスクだと思います。移住者を増やそうと思えば、低リスクの方がいいと思うので、そうなると、どこか働くところが必要になってきます。気軽に働けるような環境ができれば、もっと移住者は増えて来ると思います。

我々「ばうむ」の活動というのは、ネットワークと同じ嶺北の活性化ということで、雇用の創生ということをテーマとしてあげています。そういう意味で、ネットワークとは、目的を同じとする組織として横つながりというか、同じ嶺北の中ですので、交流を深めさせていただければと思っています。よろしくお願いします。

知事：　低リスクで仕事ができる場があることが大事というのは、おっしゃるとおりだと思います。問題は、仕事を創り出していくことがいかに大変かということです。だから、産業振興計画、地域アクションプラン、これは地元の良い素材を生かして、それを事業に発展させていこうとするものですが、「ばうむ」さんも地域アクションプランの事業として取り組んでいただいていますよね。そうやって雇用を少しずつ増やしていこうとしています。

いくら低リスクだといっても、仕事があれば何でもいいというのでは、町の将来をだめにしてしまいますので、高知県の良さを生かした取り組みを、我々も応援というか一緒にやらせていただきたいと思います。

Ｂさん：　仕事のことですが、もちろん「ばうむ」さんとか、ある程度法人的な活動をされているところをもっともっと振興させていくというのもすごく必要だと思うんですが、やはり移住をされる方は、自分で何かされる人がすごく多いです。個人ですけれども、内容はすごく良いものが多いので、法人でなくても支援をお願いしたいと思います。

知事：　県などの補助金というのは、もともとは法人じゃないと出せない仕組みだったんですが、産業振興計画とか地域アクションプランをやるにあたって、最終的に力になるようなことをしないと経済の本当の振興は得られないんじゃないかということで、いろいろな審査はかなり厳しくするけれども、それを乗り越えていただいたら、あとは個人の方でも補助金を出すという仕組みに、今していまして、これでも他の県に比べればかなり幅広いと思うのですが。

Ｂさん：　ここのあたりに住むとなったら、団体でやることさえ難しいことがありますの

で、ひとつひとつの仕事は小さいかもしれませんが、それでも３人、５人、１０人雇える仕事に、２０人、３０人となっていく可能性もあると思いますので、いろいろな面でサポートがあればすごくありがたいと思います。

知事：　人材育成とか、アドバイザー派遣とか、そういうソフト面は間違いなくできるところはあると思います。そこから先は、今すぐ即答できませんが、考えさせてください。

Ｍさん：　スギ・ヒノキの山ばかりというお話もあったんですが、これをもし切ったら補助金を出すというような制度を作れば、広葉樹林になって保水力も高まり、猪や猿が山で住める環境づくりもできるので、そういう制度を作ったらいいのではないでしょうか。

知事：　今ある人工林を広葉樹にかえるために、あえて伐採してということは多分ないのだろうと思いますが、例えば、林業をやっていて、その結果として切って、その後の山の利用方法をどうするかといった時に、地元の皆さんとも話しをしていきながら、広葉樹林にすることを選択する場合もあると思います。

ただ、直接支払いとか補助金というお話ですが、より根本的なことは、いかにして山の木をしっかりお金にかえて、林業が生業として成り立っていくようにするかということかと思います。

【知事まとめの挨拶】

皆さん、長時間本当にありがとうございました。

今日、いただいたご意見、本当に具体的な、貴重なご意見をたくさんいただいたと思っています。これを受けて、また計画や「高知で暮らす。」応援局（ポータルサイト）、こちらについても改善をしていきたいと思っています。

計画を作って終わりじゃありません。計画を作ったら必ず実行しますし、実行した上で、もっとこうしたほうがいいということとか不備があったりした場合は、ＰＤＣＡサイクルを回して、必ず改善するということを繰り返していくつもりです。

今日いただいたようなご意見を生かして改善をし、より良い効果的なものとなるように努力していきたいと思います。本当に多くのお知恵をいただきましてありがとうございました。